

講演「能力主義はなぜ人を傷つけるのか」

勅使川原 真衣 氏

要 点

講演では、能力や成果によって人を評価し、優劣をつける「能力主義」の問題点を指摘し、一人ひとりの個性や持ち味を生かし、互いに協力し合う社会の必要性について述べられた。

能力主義は、努力や成果に応じて報酬や機会を分配する仕組みとして広まってきた。しかし、人の能力はテストの点数などで正確に測れるものではなく、家庭環境や教育機会、周囲の人間関係などにも左右される。そのため、能力や成果だけで人を評価すると、評価されない人を不当に扱ったり、過度な競争によって人を追い詰めたりする危険がある。

そこで重要なのは、人を能力の高低で分類するのではなく、それぞれの「持ち味」に注目することである。積極的に行動する人も、慎重に考える人も、それぞれに役割があり、異なる特徴を組み合わせることによって、一人では成し得ない成果を生み出せる。

この考え方は、企業や学校だけでなく、家庭や日常の人間関係にも当てはまる。相手を一方的に評価したり、理想を押しつけたりするのではなく、その人の考えや個性を認め、互いに理解し、支え合う姿勢が大切である。

講演の結論は、能力を競い、優劣を決めることだけを重視する社会から、一人ひとりの違いを認め、それぞれの持ち味を生かし、協力し合う社会へと転換する必要があるということ。

質疑応答では、能力主義を問い直すためには、社会の制度や評価の仕組みを見直すだけでなく、身近な人との接し方を変え、一人ひとりの個性や置かれた環境を理解することが大切であると示された。

また、福祉や就労支援の実践から学び、能力や成果だけで人を判断するのではなく、それぞれの持ち味を生かせる環境や仕組みを整えることが重要であると話されました。